

F2-68

## ブルーノ・タウトによるドイツブリッツ連棟住宅の配置設計による 屋外居住空間の居住者意識

Resident awareness regarding the layout and outdoor living space of a Bruno Taut-designed terraced housing complex in Britz, Germany

○小木曾裕<sup>1</sup>, 山崎晋<sup>1</sup>

Yutaka Kogiso<sup>1</sup>, Shin Yamazaki<sup>1</sup>

Abstract: The results showed that approximately 80% of respondents were aware in everyday living of a Bruno Taut-designed intention to embrace the concept of outdoor living space in the building layout. Those with higher awareness tended to value the landscape-friendly asymmetrical design implemented to create space with subtle variations in house.

### 1. はじめに

2008年ユネスコ世界文化遺産に指定されたドイツの建築家のブルーノ・タウト（以下タウト,1880～1938）が中心となり設計した、1925～31年に建設のブリッツの馬蹄形住宅を中心とした大規模住宅団地がある。その中で馬蹄形集合住宅の配置と中庭の先行研究<sup>[1][2]</sup>の文献等調査の中で、馬蹄形住宅と形態が異なるが、タウトの設計意図が深く表現されている、馬蹄形住宅周辺に配置した連棟住宅等に焦点を当てた。居住空間は家の中から風景を外に広げた住まいを作り出すという思想を屋外居住空間（Außenwohnraum）という考えを持ち設計していることを探りあてた。そこで、タウトの設計意図をどのように居住者が感じているかを明らかにし、集合住宅の建物配置と建物と屋外空間のより良いあり方の基礎的知見を得ることを目的とした。

### 2. 研究方法

ブリッツ大規模住宅団地(Großsiedlung Britz)は、馬蹄形住宅が扇の要で、それを中心に連棟住宅と3階建て住宅等が配置されているが、その馬蹄形住宅の周辺建物の一連の配置設計思想を持った設計の1・2期6期を研究対象エリアとした。2014・15年に連棟住宅等の建物と屋外空間等の現地調査をした（図-1）。更にタウトの屋外居住空間等の設計思想を巻末等の文献<sup>[4]</sup>とヒアリングにて整理・把握し、居住者にその内容を確認するためにアンケートとヒアリングを実施した。

### 3. 結果と考察

#### (1) 属性等

回収率は11%の100戸、年齢構成40・50・60歳は全て20%以上で、20・30・70・80代以上が約10%以下で、全世代意見を集約できた。入居年は世界遺産登録後の居住者が一番多く約40%で1971年から調査時点までが95%を占めた。

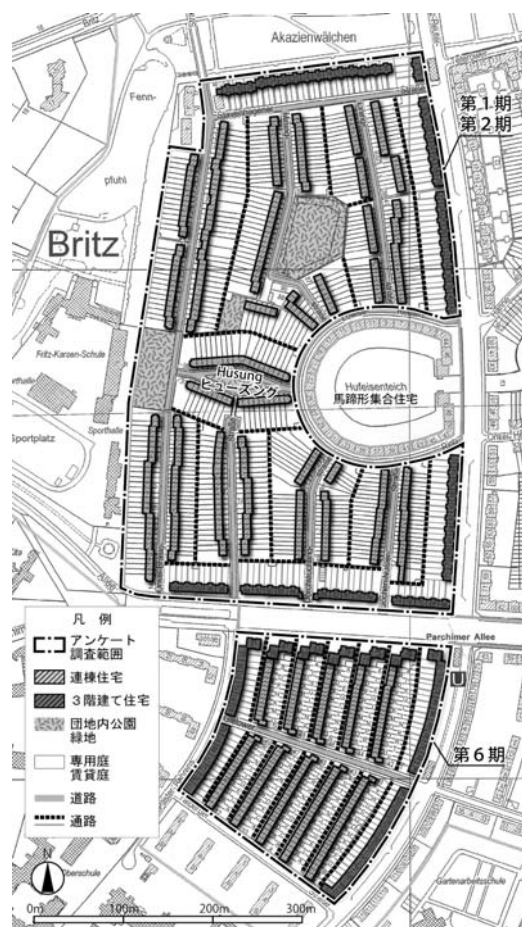


図-1 ブリッツ第1・6期連棟住宅の建

1：日大理工・教員・まち

(2) 連棟住宅等の建物配置の設計意図の居住者意識

タウトが意図した馬蹄形住宅と連棟住宅等の建物配置と屋外を一体に捉えた設計や、居心地や調和を考慮した設計により高い資質を持ち得ることについて、居住者の認知と把握を目的に質問を行った。その結果、約 9 割が入居以前からこのことについて認知し、タウトに対する教育・研究も多くの居住者が行っており、現在は全ての居住者がタウトが設計したことを知っていることがわかった (図 - 2a)。

次に、連棟住宅等の特徴として、景観を住戸と統合する為に、「屋外居住空間」の概念を取り入れ住宅や建物配置の設計をしていることが挙げられる。この設計意図を居住者は居住実感として意識しているか質問した。その結果「非常にそのように思う・そのように思う」は 82%で、専門家：建築家・都市計画家・ランドスケープアーキテクト等が 9 名いて、屋外居住空間を研究し把握していた。入居前後の文献での勉強・研究等により実感している人、この事を住みながら実感している人もいて「タウトは緑の中での近代的住まい方のパイオニア」等の意見の人も数名いた。「屋外居住空間」は起源を遡れば生活空間に大幅に自然を導入した「田園都市」から来ていると考えられる (図 - 2b)。

(3) 連棟住宅等の非対称配置の設計意図の居住者意識

馬蹄形住宅の西側にこの地特有の農村共同生活体として見られる菱形の「ヒューズング」の住居棟を配置し、住棟を少しずつ外側に広げ中庭を形成している。タウトはブリッツでは村落の特徴を中心に据えていて、その考えは庭園都市を連想させる「ヒューズング」集合住宅の幅広い村の通りに最も明確に表現しているが、この設計意図の感じ方を確認した。その結果、「非常にそのように思う・そのように思う」が 73%で、研究・

勉強をしたり、住んでいる実感から、「ヒューズングの広場は村の集落にある芝生広場から着想したもので、このような広場が中心部を形成するブランデンブルク地方の村の構造を採用したことは明らか」等の意見が得られ、ヒューズングを地域の村の集落のあるべき姿として認識して、地域特有の馴染みある空間として生活実感から評価をしていた (図 - 2c)。

更にタウトは馬蹄形住宅とヒューズングの周辺に、街路空間や広場空間を自然な形で配置した。それらはタウトの構想「屋外居住空間」つまり屋外に位置する住宅地空間を形成している。タウトは綿密に考え抜かれた関連性でもって家屋の列を微妙にずらし空間を作り出し、家屋の列を左右非対称に配置している。これについての居住者の感じ方を質問した。その結果、「非常にそのように思う・そのように思う」は 73%で生活実感と感じている人は、「住居と生活の質を結びつけている」等の意見があり (図 - 2d)、タウトは工夫を凝らし、建物と屋外空間の微妙な空間をつくり、単調な景観にならぬよう考慮した個性的な通路景観や、庭のゲートに繋がる小道等にその意図を居住者が認識していることがわかった。

(4) 屋外居住空間と居住者意識の各設問の関係性

連棟住宅等の屋外居住空間及び年齢・居住年と居住者意識の各設問の関係性に関してカイ二乗検定で統計処理結果を行った。その結果、居住者はタウトの連棟住宅等に関する屋外居住空間の設計意図を住みながら実感する人は、ヒューズングの設計意図や左右非対称の綿密な屋外空間を醸し出す配置の関係性を共に評価していることがわかった。年齢との関係は、ヒューズングの設計意図を除いて全ての設問に対して、若い人程屋外居住空間を始め全ての項目を住みながらより強く感じている傾向が見られ、近年入居した人程、この設計がタウトの設計であることを認識していた。

4. まとめ

タウトが「屋外居住空間」の概念を取り入れたブリッツの連棟住宅等の建物配置と屋外空間の関係性に対して、居住者は研究・勉強により知るとともに、現状の生活実感からその設計意図を約 8 割の人が感じていることがわかった。

引用文献

[1] 小木曾裕 (2013) ドイツブリッツ馬蹄形集合住宅の中庭における緑に対する居住者意識, 環境情報科学センター, 環境情報科学論文集, 27, 215-220  
 [2] 小木曾裕 (2014) ブルーノ・タウトによる馬蹄形集合住宅の配置と中庭の設計意図に対する居住者意識, 日本造園学会, ランドスケープ研究, 77, (5), 685-688

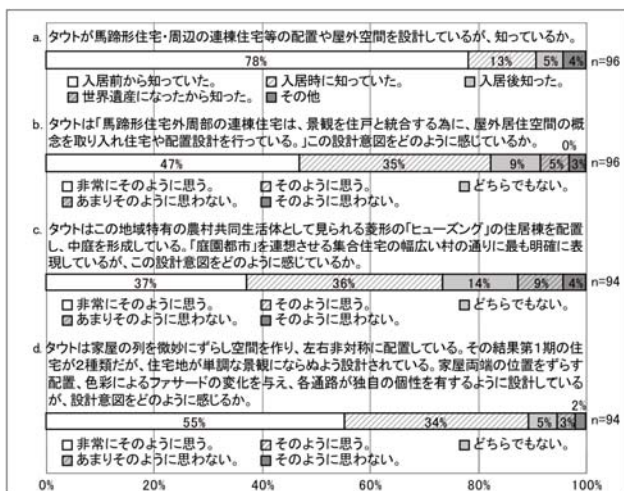


図 - 2 ブリッツ連棟住宅の屋外居住空間の設計意図